

# IT活用による「楽しく学べる講義」の実現

江戸川大学 社会学部 天野 徹 ( mail@amanolab.org )

## I. はじめに

### ① 学生達の現在

- ・ 学生たちにとっての講義時間… 退屈な「義務」  
「高校時代の社会科の講義は、時間が始まると、先生が教科書のまとめを無言で板書してから、教室の後ろに回って、板書を写す学生の背後から、教科書を大きな声で朗読する時間だった（学生の話）」
- ・ 学生から寄せられた、信じられない要望  
「私たちには、先生のお話を聞きながら、板書をノートするだけの能力がありません。書くか話すか、片方にしてください。ノートをとっているときに話さないでください（学生の話）」

### ② IT 以前の対応策

- ・ 板書の時間を省略する  
講義内容のコピーの配布と、重要個所にラインを引かせるという講義形式→ おおむね成功
- ・ 講義内容に関心を持たせる  
講義内容を、学生たちの身近な話題に関連付け、適宜クエスチョンとして投げかける  
→ 居眠り、私語の学生が減少  
but …  
講義内容そのものに対する理解は疑問  
誤字・脱字が多く、なぐり書きをするも多い

### ③ 推測される原因

- 生活習慣の問題… 「月曜日の講義は眠い」…  
講義の前提となる知識や情報・体験の不足  
常識やマナー、品性や恥の意識の欠如  
予定調和的に組み立てられた板書や口述だけの講義の退屈さ

- 講義を、良質な「イベント」として構成する  
必要性… ツールとしてのITの活用

## II. 基礎ゼミナール（新入生対象）の場合

教育法を工夫することで、受講生同士のコミュニティ形成をスムーズに行う。その上で、ITを活用しながら様々な生き方や考え方に触れる機会を提供することにより高校までの意識を改革し、議論の方法や論文の書き方を学ぶ過程で、大学における学問のイメージを理解させる。

### ① 講義の組み立て

#### Step1. 新しい社会環境への適応

イメージマップを用いた自己紹介と、新入生同士のコミュニケーション

#### Step2. 高校までの勉強の常識を払拭

- ・ 様々な人生、様々な問題、様々な考え方がある  
ことを、ビデオ教材を用いて伝える  
…ドキュメント、ニュース、時事番組に加え、  
歴史や教養番組も活用  
※十五～二十分にひとつのクエスチョン

#### Step3. 様々なトピックについて、ディスカッション

- のしかたを学ぶ  
・ 立場・意見の異なる人々との間での情報交換、  
意見交流、論点整理および説得の作法を伝える  
…若者のディスカッションの番組を活用  
※小論文作成のためのガイドブックを併用

#### Step4. ひとつのテーマについての論点を整理し、

- 小論文の構成や論理の作り方を学ぶ  
・ 様々な意見を取捨選択し、自分のテーマを明確化  
して、論理的な文章展開をする方法を伝える  
…討論番組、特集番組、シンポジウム番組等  
※ホワイトボードを用いた、議論の視覚化

### ② これまでの実践からの暫定的結論

よくまとめられたTV番組を用いることで、講義をより効果的に進めることは出来るが…

△「行列の出来る法律相談所」のように、①論点が整理されている番組、②主旨が異なる番組では、講義の目的が伝わらない可能性が高い。

△「講義用」につくられた番組教材では効果は低い

### Ⅲ. 講義形式の場合（都市社会学・地域情報論）

学生の多様化と、関心領域の細分化、共感能力・想像能力の低下により、教養関係の分野においては大人数の講義は成立しにくい。また、九十分の講義時間の間、集中力を持続させるのが難しい学生も多い。（月曜日は眠い、五限は眠い、という学生も存在。）

講義において、うまく IT を活用することで、こうした状況にある程度改善し、講義という社会空間を、学生と教員の双方にとって、有意義な社会空間に再構成することができた。

#### ① 講義の組み立て

**Step1.** 講義の予備知識の理解、および、現実に行っていることの追体験

講義内容には関心がありながら、前提となる知識や体験が不足している学生、自ら本や関連記事を探したり関連するテーマの番組を視聴するなどのアクションを起こす学生は少ない。また、そうした情報に触れた際に、現象の意味や文脈、背景や構造などに思いが至る学生は、さらに少ない。

こうした現実を前提として、学生が日常的に接触可能な情報源から、ビデオ・ソースを選択し、整理した上で講義に使用する。講義では、十五～二十分に一回程度、適当なクエスチョンをなげかけながら、講義の時間を、学生にとっても教員にとっても意味のある社会空間に仕立てていく。

#### Step2. 具体から抽象への段階的移行

学生たちの予備知識や予備体験が一定のレベルに達し、クエスチョンに対する回答のレベルが上昇してきたことを確認しながら、講義方法を「具体的な問題を扱ったビデオ中心」から「抽象的な理論にも触れているテキスト中心」へと、次第に移行させていった。

#### Step3. 試験対策の指導

重要な概念やデータの読み方、答案の書き方などとともに、試験時にスクラムを組むことのできる仲間を作る機会を、講義中に設定。これにより、同じ講義をとっている友人が初めてできた学生や、大学での答案の書き方が高校までとは違うことを初めて意識した学生がいることが明らかとなった。

### ② これまでの実践からの暫定的結論

○ビデオ教材と、学生達の関心を引くクエスチョンの組み合わせによる、講義の構成は、学生達の参加意識を高め、私語や欠席率が減少するなど、学習効果が上がっている。学生達の満足度も向上している。

○教科書と印刷資料および板書と口述という従来の講義とは異なり、講義内容をリアリティを持って受け止める学生が増えているという実感がある。

### Ⅳ. これからの大学教育における IT の活用について

#### ① 教員に求められるものとは

☆同時代的な事柄に関する様々な情報を、教員のセンスでエディットし、講義等で活用していく必要

※番組には著作権が存在し、ネット配信は不能

＝ IT 時代における、面接講義の活用の存在意義

#### ② IT 教育時代、教員の受難

△但し、多様な経験と関心を持つ学生の存在、社会状況の変化の変化、放送コンテンツの状態などをにらみながら、講義を常に意義のある学びの社会空間としてプロデュースしていくためには、教員の側が、常に多様な関心に基づいて放送コンテンツをチェック・蓄積し、学生の状態に応じて活用する必要があるが、そのための時間・労力・費用は膨大である。☆学識に加えて、センスと情熱と私財そして時間と労力の投入の覚悟が問われる時代に入ってきている。

#### ③ 教育現場での IT 活用における可能性と限界

○大学教育も、成果が問われる時代に入ってきており、一方で専門教育の効率化を目指す大学があるのに対し、学生の多様化により講義が成立しない大学、退学率が非常に高い大学も多く存在するといわれるが、私の担当講義では、IT の活用により、八割～九割程度の学生について講義に対する満足度を向上することができた、という実感がある。

×学生達の中には、極少数ではあるが、講義内容よりも教員個人との相性を理由にして、教員の努力をあざ笑うかのように私語を続ける学生や、講義中に反抗することで仲間内でのステータスを維持しようとする学生、迷惑行為を繰り返す学生も存在し、講義中、目に余る態度に注意しても、全く意味をなさないことがある。彼らへの対処が今後の課題である。